

## 発行責任者

外旭川病院ホスピス 嘉藤 茂  
〒010-0802  
秋田市外旭川字三後田142



TEL 018-868-5511  
FAX 018-868-5577  
HP [www/jkk-sotohp.or.jp/sotohp/](http://www/jkk-sotohp.or.jp/sotohp/)

## 日本死の臨床研究会を秋田市で開催しました！

大会長（ホスピス長） 嘉藤 茂

第41回日本死の臨床研究会年次大会は、10月7日、8日の2日間にわたり秋田市で開催され、無事に終了しました。全国から予想を超える多数の参加があり、事前および当日の参加登録は2334名で、市民公開講座の参加者は1080名でしたので、その半数が市民と仮定すれば、合計の参加人数は2800名を超えたことになります。

「秋田に来てよかったです。」、「また秋田に来てみたい。」と感じていただけるように願いながら、私たちなりのおもてなしを計画いたしました。懇親会場を含むと4会場での分散開催でしたので、しっかりとしたおもてなしのために1日当たり250名のスタッフが必要でした。この大人数を県内の病院から派遣していただき、当日が初顔合わせの状況にもかかわらず、各病院のリーダーの皆さんとともに短時間で協力体制を作り上げ、役割を果たしてくださいました。ただただ、感謝です。

ホスピスボランティアの皆様からも2日間にわたり力強い応援をいただきました。秋田駅から会場までの路上での道案内や、各会場内のトイレの案内などをお願いしました。初日の午前中は雨でしたので、外の道案内では特にご苦労をおかけしました。大会長という立場上、日に何度も会場間を往復したのですが、その都度、ボランティアさんたちの笑顔の応対に触れることができました。参加者はもちろんのこと、主催者側の私にまで労いの言葉をかけていただき、とてもうれしく、心強かったです。

学会のプログラムは盛り沢山でここですべてをご紹介できませんが、これだけはぜひ、とい



大会の挨拶をする嘉藤大会長と石川大会長

う企画のご報告をします。それは、当院ホスピスボランティアコーディネーターの寺永さんのご講演で、演題は「ホスピスボランティア20年の実践」です。ホスピスボランティアの存在意義、ボランティアがケアチームに加わることでケアの質が向上すること、病院内にボランティア活動を定着させるためのコツなどについてお話し下さいました。お話の最後では、20年にわたり活動が継続できた原動力は、活動が楽しく、生きがいを感じるからだとし、「地位や名誉やお金ではなく、相手に求められることをしっかりと行うように努力することで、真に自分を育み、他者に貢献することにつながるのではないか。」との寺永さんの哲学に対し、大勢の聴衆が頷く姿がとても印象的でした。

私自身は開催の責任者という立場でしたので、しっかりと責任を果たせるだろうかという不安もあったことは事実です。しかし、開会式が終わり、各会場でのプログラムが開始された段階で、その不安はどこかへ消えました。当院所属の皆様のみならず、秋田県のスタッフが一丸となって、それぞれの場で確実に役割を果たしてくださっている姿を目にすることができたからです。

今、このご報告を書ける幸いを身にしみて感じております。皆様、ありがとうございました。





## 雨の秋田もいいね、に救われました

実行委員長 松尾 直樹

この度は皆様の多大なるご協力をいただき、死の臨床研究会秋田大会を無事終えることができました。私は大会の実行委員長として携わらせていただきました。

最初に大会長であり、当院ホスピス長の嘉藤先生より、秋田で死の臨床研究会を開催すること、そして実行委員長をお願いするというお話をいただき、実に夢のある、素晴らしいことだと思い、すぐに賛同しました。しかし、過去の大会を開催した皆様から聞こえてくるのは「実行委員長は大変だよ」という話。どんな大変な仕事が待っているのかと不安になりました。

しかし、大会長の嘉藤先生、市立秋田総合病院の石川さんのお二人の先導で始まった実行委員会は、振り返れば実に順調であったと思います。

まず、大会全体のテーマの選定は、嘉藤先生が素晴らしいテーマを考えてくださいました。「ケアする私を育む」患者さんを支えようとする「私たち」に焦点を当てるというこの考えは、ケアする職種であれば、誰でも関心があること。普段、最も悩んでいることであるのに、今まであまり焦点が当てられませんでした。どちらかというと「患者さんをどうしていったらいいのか」という視点で私たちは物事を考えてきました。

しかし、ケアは双方向性だと思います。ケアする私たち自身の状態がどうあるかは非常に重要です。このことを明確に意識し



座長も担当する松尾実行委員長

た今回のテーマに大変共感を覚えました。

実行委員長の仕事は多岐に渡りました。嘉藤先生や石川さん、事務局の皆様の大変さに比べたら、私の仕事量はわずかに思えるのですが、それでも大変だと思ったのは、慣れない抄録集の校正作業とマニュアル作成です。校正作業は嘉藤先生、石川さんと休日に朝から晩までかかって行いました。目が疲れましたが、演者の皆様の抄録をじっくりと拝読するとても良い機会となりました。

また、大会は各会場の進行は、当院と市立秋田総合病院のほかにも秋田県内の多くの病院にご協力いただきました。各会場が滞りなく進行できるようにマニュアルの作成をしたつもりでも、しばしば不備があり、当日まで大変な不安を抱いておりました。ところが、実際には、どの病院の皆様にも、とてもスムーズに進行していただきました。「秋田に来てよかった」という目標に向かって、秋田県内の病院が一丸となって頑張っていただいたのだと思うと感慨深いものがあります。

さて色々と大変だったことは、大変だった今回の死の臨床研究会の開催でしたが、雨の秋田に来た参加者が「雨の秋田もいいねえ」と言っていたという言葉を聞いて、本当に救われました。

皆様のご協力誠にありがとうございました。



開会前に打合せをする第一会場のスタッフ



## 学会で発表しました

ホスピス病棟に入院している患者さんは、症状コントロールの希望の他に日常生活においても様々なニーズを持っています。そのニーズに応え、QOLを向上させるためには多職種チームによる関わりが欠かせず、なかでもボランティアは重要な役割を担っています。

ボランティアも患者さんと関わる中で死別は避けられず、グリーフを抱えていることが考えられます。しかし、ボランティアのグリーフの現状は把握されていないため、当院ホスピス病棟におけるボランティアの患者との死別によるグリーフの現状を明らかにすることを目的として、ホスピスの研究委員で「ホスピスボランティアの患者との死別によるグリーフの現状」というポスター発表を行いました。

今回の研究で、ボランティアは患者との死別によるグリーフを抱えていること、日

### 2階ホスピス看護主任 山平 恵

常生活の中でも亡くなった患者を思い出し、自責の念や活動の不足感といった心残りがあることが明らかとなりました。また、患者との死別で抱いた感情を誰かに語ることがグリーフを癒す力となっていることもわかりました。

今後は語り合う場の設定を検討するなど、患者さん・家族を支える大切な存在であるボランティアが力を発揮しやすいような環境・チーム作りを共に行っていきたいと思っています。

研究発表は当日までの準備は大変でしたが、研究委員で様々な事を語り合いながらケアの質の向上について検討できることは良い経験になりました。また、一度立ち止まり日々のケアを振り返り検討することの大切さを感じる機会となりました。



発表する山平主任

## 学会に参加して



### 5階ホスピス看護主任 赤木 郁子

日本死の臨床研究会年次大会はホスピスで働く私にとって、緩和ケアの第一人者でおられる先生方の言葉に触れ、刺激を受ける場であると同時に、日々私たちと同じように迷い、悩みながらケアを行っている全国の看護師の方々の言葉に励まされる場であり、今までの自分の看護を見直す場でもあります。そういう大会が今年、ここ秋田で開かれるとは本当に嬉しいことでした。

そして今回、私は微力ながら裏方を担当する機会をいただきました。裏方をやってみて感じたのは、表には現れないたくさんの方々の支えがあって、今までこの大会が開かれてきたんだなあ・・・ということです。これまで主催されてきた方々に感謝するばかりです。

また私の役割は、演者・座長受付係で当日だけのことでしたが、この日までの準備がどれほど大変だったか！と運営事務局の皆様方

のご苦労に頭の下がる思いでした。

5階ホスピス病棟からは入職3年目の浅野成実さんがシンポジストとして「ケアの不全感」というテーマで発表してくれました。発表の前日「落ち着いているように装っていますが、今から内心ドキドキです」と不安を話していた浅野さんでしたが、当日は立派に堂々と発表され、チーム医療の大切さを語ってくれました。3年前、新卒で入ってきた浅野さんのその成長ぶりを感じる場もありました。

大会後、県外から参加した知人からは、「秋田の皆さんのがスピタリティを感じた」という言葉をいただきました。皆で大切にしてきたおもてなしの心が届いたのかなと嬉しく思っています。





## 貴重な経験でした

ホスピスボランティア 加藤 節子

10月に開催された日本死の臨床研究会年次大会にボランティアとして2日間参加しました。1日目、前日に目覚まし時計3個をセットして5時起き、午前7時、ふれいあい交流館AUに集合、ミーティングの後、それぞれ担当の会場へ、私はアトリオン会場の女子トイレ誘導係でした。

責任者から役割と注意事項等の伝達があり、連絡用としてトランシーバーを渡されました。トランシーバー使用は初体験で、初日は上手に繋がりませんでしたが、2日目はばっちり！TVで見る刑事ドラマのガードマンにでもなったような気分でした。

トイレ誘導に関しては、2階、3階はトイレの数が少なく、時々行列になりましたが短時間で解消、大きな混雑にはなりませんでした。参加者の皆さんからはトイレ以外の問い合わせ

（休憩場所、食事のできる場所、講演会場への案内）が多く、自分の担当分野だけでなく大会全体を把握することが大切と感じました。

初日は勝手がわからず、緊張しながらずうと立ちどうしだったので大変疲れましたが、2日目はアトリオン会場のボランティア活動に余裕ができ、時々講演会場の中に入って講演を聞くことができました。

今回、学会という大きな組織の全国大会にボランティアとして参加できたことは私にとって貴重な2日間の経験でした。今回のボランティア活動を通して得た一つ一つの大切なものを心の糧にこれから活動を続けてゆきたいと思います。



## 学会のお手伝いをして

ホスピスボランティア 伊藤 一女

秋田駅中央口を右に出て、ぽぽろーど入り口に立つ。本大会のボードを手に掲げて2人1組でご案内する、というのが私達の仕事でした。

このため、10月7、8日の2日間朝7時に集合しました。（私は片道車で50分かかる郡部在住）

開催中の初日は、秋田はあいにくの雨で想像以上に肌寒かったが、私達は秋田を代表するような気持ちで立っていたと思います。お天気が悪いのも、自分たちの責任のように申し訳なく思ったりもしました（自然とそのようの気持ちになりました）。

駅構内で大会のチラシを手にしている方には、こちらからお声掛けもしました。開催会場が3か所に分かれていたため、案内のチラシを見ながら、戸惑い気味の方々が多かったです。

メガネをかけた背の高い紳士に、「あなた

方のような存在がこの大会を支えてくださっている・・・」と誉めていただき嬉しく思いました。この方は傘売り場までご案内いたしましたが、内気な秋田県人として恥ずかしい気分もありました。

お昼のお弁当をいただき駅から秋田県民会館まで行く間、横断歩道や屋外に立ってご案内するボランティアの仲間を何人も見ました。雨の中本当に頭の下がる思いでした。

本大会は1年も前から準備されてきた大重要なイベントだと聞いていました。このような大きな大会のお手伝いができたことは、自分にとっても有難いことであったと思します。



誘導係が立っていたぽろろーど



## 第41回日本死の臨床研究会年次大会を終えて

大会事務局 佐藤 悠一

この度、平成29年10月7日～8日の日程で第41回日本死の臨床研究会年次大会が秋田県で開催されました。大会長として外旭川病院嘉藤茂医師と市立秋田総合病院石川千夏看護師、実行委員長は外旭川病院松尾医師が務めました。会場は秋田県民会館、アトリオン、にぎわい交流館AUの3会場を主会場として懇親会場が秋田キャッスルホテルにて開催しました。学会の参加人数は2日間を通して2334人と2000名を突破し、初日の夜に行つた懇親会も300名を超える参加者で盛大に盛り上がることが出来ました。今回、大会事務局として全国からの参加者の皆さまへ「おもてなし」を一番に考え、大会へ参加しました。大会中のスタッフも会場が3会場だったこともあり、秋田県内の各医療機関の医師をはじめ、看護師、事務職など多数のスタッフへのご協力をいただくことで「チーム秋田」で最高の「おもてなし」をすることが出来たと思います。

今回の年次大会には私自身も事務局という重要な役割で参加させていただき、大会終了した今もあらためて感慨深いものがあります。思い返すとこの学会に臨む準備段階で2年前に嘉藤大会長から一緒に手伝って欲しいと声をかけていただきました。当時は死の臨床研究会のことは何も知らず、とりあえず指示があることはミスなく頑張ろうと思っていました。しかし、どんどん時が経ち岐阜大会、北海道大会と視察で訪れながら、この学会の存在意義や重要性を肌身で感じ、秋田大会も必ず成功させなければいけない重圧も日に日にのしかかっていました。そんな時でも私がとても助けられたのが、一緒に大会を準備してきたコアメンバーでした。嘉藤、石川大会長はじめ松尾実行委員長、佐渡事務長など多くのメンバーに支えてもらいながらこの日を迎えたと感じています。大きな壁に1人でチャレンジするのとは違い、中心となるコアメ

ンバーで1つの「学会を成功させる」という大きな目標を達成するため、作り上げていくことの大切さを今回の学会で多く学ぶことができました。実際、大会が始まってみると私も県民会館の第1会場担当でしたが、3会場すべての会場でスタッフが与えられた仕事に真剣に取り組んでおり、全国から訪れる参加者へ「おもてなし」の心が浸透していました。大会終了後に参加した方々からも「秋田大会はとても温かい学会でした」「竿燈披露や懇親会の料理、なまはげの披露などたくさんの演目で楽しませてもらつた。今までで一番充実した楽しい学会でした。」と多数のお言葉を頂戴することができました。

今回の第41回日本死の臨床研究会年次大会を通して、大きな問題もなく無事に終了することができ事務局としても大成功だったと感じております。これもひとえに大会中にお手伝いをいただいた秋田県内の各医療機関の病院長先生はじめとする、すべての関係スタッフの方々からのお力添えあってのことと、心より感謝しております。私も今回の大会でたくさんのこと学び、大きな経験をすることができましたが、まだまだ経験不足な面も多く、自分を見つめなおす良い機会ともなりました。今後とも皆様にはご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ致します。



県外からの参加者に大好評だった竿燈演技

## 第一線でのおもてなし

ボランティアコーディネーター 寺永 守男

今学会（第41回日本死の臨床研究会年次大会）の準備の早い段階で、大会長から多くのボランティアスタッフが必要なので、ホスピスボランティアの皆様にも協力してもらえないかというお話しがありました。それを受け、活動に来てくださるボランティアお一人お一人に声をかけたところ、特別の理由がある人を除き、すべての方が迷うことなく「手伝いますよ」という心強い言葉をいただきました。このような学会に興味があるからという理由もあると思いますが、秋田で開催され、かつ、外旭川病院が主体となっている当学会を成功させようという皆様の気持ちが伝わってくるようでした。

開催も近くなり、ホスピスボランティアに割り当てられた業務は、主として「野外の誘導係」と「館内でのトイレ誘導係」でした。お一人お一人に担当をお願いする際、もしかしたら、学会に直に触れる講演会場での業務を期待している人がいるのではと心配していましたが、今回も誰一人として、嫌な顔を一つせず「いいですよ」という返事をいただきました。「学会に関することなら何でも協力しますよ」という皆様の有難いお気持ちが伝わって来て、心が温まる思いでした。

野外での誘導場所は、学会参加者の皆様が到着される駅の改札口とリムジンバスの降車場所からはじまり、開催場所に至る要点計11カ所でした。関係者一同「温かいおもてなし」

を合言葉にしていましたが、まず最初に、参加者の皆様に「おもてなし」を提供できたのが、野外誘導係であったと思います。2人1組で、交代しながら誘導をお願いしていましたが、皆さん「おもてなし」の気持ちに溢れ、殆ど休みまずその場所に立っていたようです。結果、「足が疲れて大変だった！」という本音も聞かして下さいました。

館内のトイレ誘導も同じで、講演中はトイレは混みませんので休み、休憩時間帯に頑張ってくださいとお願いしていましたが、殆ど座ることなくその場所にいてくださったようです。それは、トイレ誘導に關係なく、いろんなことを尋ねられるのでそこを動けなかったと言う事で、これも「おもてなし」の強い心がそうさせたのだと思います。

会場へ向かう参加者の中には、傍を通り過ぎる時に、「お疲れさま」「ご苦労さま」「有難うございます」と声をかけてくださる方がおられ、学会に参加してくださった多くの皆様に「おもてなし」の気持ちが伝わったのではと嬉しく思います。



懇親会でのおもてなし なまはげ太鼓

### 編集後記

10月の学会主催、11月の病院機能評価受審という大きな行事のため、「さんぽみち」の発行が12月にずれ込みました。今年1年、ともに力を合わせて、それぞれの役割を果たす取り組みを継続できたのではないかと思います。皆様に心からの感謝を申し上げます。このクリスマスの季節に、ツリーとケーキとプレゼントを楽しむのはもちろんのこと、イエス・キリストのご降誕という神様から人類への歴史上最高のプレゼントを喜ぶとともに、その意味を心に刻む時でありたいと願わざにはおられません。

(S.K)

神は、実に、そのひとり子（イエス・キリスト）をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

(ヨハネ3:16)